

浅草喜劇人銘々伝

6

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

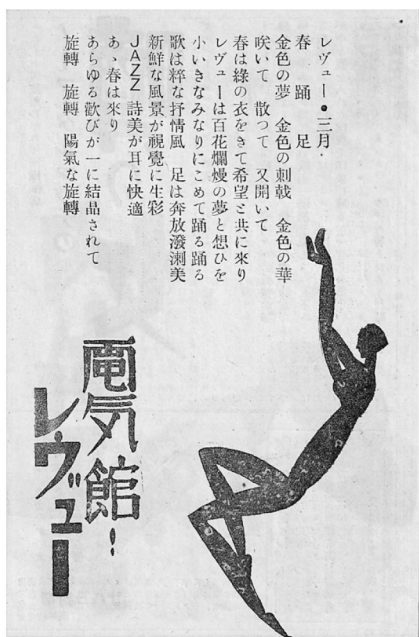
「電気館レヴュー」篇

浅草レヴュー喜劇の草分けと言えば、エノケンこと榎本健一を売り出した「カジノ・フォーリー」を思い浮かべる人が多いだろう。しかし、実はカジノが旗揚げする寸前まで5ヶ月にわたって活動した「電気館レヴュー」こそが本当の意味での草分けと言えるのである。

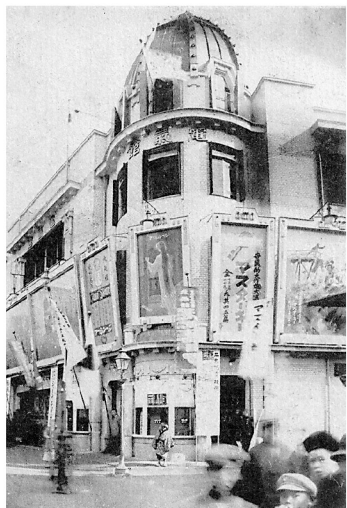
〈レヴュー〉とはバリで流行していた、一つのテーマを歌と舞踊と時事風刺調の寸劇（スケッチ）で繋いで見せる舞台様式で、日本で最初のレヴューは昭和2年9月に宝塚少女歌劇の花組が上演した『モン・パリ〜吾が巴里よ！〜』であった。浅草では松竹座で松竹楽劇部（のちの松竹少女歌劇）が同3年8月末から『虹のおどり』、12月に『奉祝行列』と題したレヴューを上演したが、宝塚も松竹も女性だけのレヴューであり、寸劇による笑いの要素は少なかった。日本初の常設映画館として明治36年に開場した浅草・電気館では、昭和3年4月から映画のアトラクションとして、日本におけるジャズの先駆者と言うべき井田一郎が率いる

ころ、「電気館ではハダカ・ダンスをやっている」と六区中の大評判となった。

第6回公演はオスカー・ワイルドの『サロメ』を内山の作・演出、澤の振付、井田の編曲でレヴュー喜劇化した『サロメはジャズる』で、内山の著書『浅草オペラの生活』によればサロメとヨカナンが駆け落ちしてパリや吉原やハワイやブロードウェイに逃げ、王様の命令を受けた探偵長が追う形で各地の歌や踊りを見せるものだったという。プログラムを見るとサロメが木村、ヨカナンが里見明、ヘロデ王が柳田、探偵長が萩原隆男となっている。第13回公演『レヴュー・カルメン』では木村がカルメンを妖艶に演じた。



電気館レヴューの第4回公演『ジャズ・カクテル』が上演された昭和4年2月21日発行の電気館ニュースより。電気館レヴューを讃える詩が掲載されている。（筆者提供）



浅草・電気館の外観。昭和4年2月から5ヶ月間にわたり映画のアトラクションとして「電気館レヴュー」を上演した。（筆者提供）

チェリーランド・ダンス・オーケストラのジャズ演奏と浅草オペラからジャズソングに転じた二村定一の『アラビヤの唄』『青空』などの独唱を聴かせて評判を呼んでいた。そこへレヴューの流行と共に電気館でもレヴューをやろうということになり、奥役に石田一郎、作・演出の内山惣一郎、幕内主任が東五郎、出演者は木村時子、柳田貞一、高井ルビーら根岸大歌劇団に居た人たちが中心となって電気館レヴューの第1回公演が昭和4年2月1日から行われた。題名は『モダン東京八景』。映画館なので舞台は奥行きがなく本格的な舞台セットが組めないため、背景無しか平面的な書き割りだけで神田聖橋や銀座のカフェーなどの場面を見せ、二村の『君恋し』やビクターの人気歌手である佐藤千夜子の『波浮の港』、澤カオルのダンスなどが井田の指揮と編曲による演奏でスピーディーに展開された。以降は映画の封切りに合わせて1週間ごとに新作が上演され、第5回公演『愛の古巣』では南の島の女たちがフラダンスを踊る場面で事前に注文した衣裳が届かず、急遽、乳隠しとヴェールを巻いたズロースという姿で踊らせた

多くの観客を集めた電気館レヴューだったが、劇場主とレヴュー団の経営者との間のトラブルにより、昭和4年6月に解散となった。

6月24日に法政大学映画研究会シニアの主催で日本青年館で行われた『カレッヂ映画とレヴューの夜』には電気館レヴュー団が出演しており、プログラムに名前のある中村是好、間野玉三郎、東綾子、中村操、島田博は幕内主任の東五郎と共に7月10日に浅草・水族館の2階で旗揚げしたカジノ・フォーリーに参加する。二村は5月3日から上野みやこ座に出演し、8月10日からは内山、澤、井田が浅草・公園劇場での「レヴュー劇団さそり座」公演で『サロメはジャズる』を再演している。

※34ページの写真も併せてお楽しみ下さい。

西条昇の浅草喜劇コレクション 「電気館レビュー」篇

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ（P12-13）と併せてお楽しみ下さい。



電気館レビュー第2回公演『モダン行進曲』が上演された昭和4年2月7日発行のプログラムより。二村定一が『アラビヤの唄』『君恋し』を独唱した。



電気館レビュー第5回公演『愛の古巣』が上演された昭和4年2月28日発行の電気館ニュースの表紙。踊り子の乳隠しとズロースでの舞踊が評判となった。



電気館レビュー第6回公演『サロメはジャズる』上演の昭和4年3月7日発行の電気館ニュースの表紙はレビューガールが描かれている。



昭和4年3月14日発行の電気館ニュースには電気館レビューを讃える詩〈そは——電気館レビュー〉と上半身裸の女性のイラストが掲載されている。



電気館レビュー団が昭和4年6月24日に出演した日本青年館での法政大学映画研究会シニア主催『カルレッチ映画とレビューの夜』のプログラム。『レビューとジャズ』と題し、井田一郎バンドも出演。

西条 昇 江戸川大学教授、喜劇史研究者。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

